

上演 |

2023年7月30日 | 校目
関東 ブロック (東京都)
立川女子高等学校
「あのこをさがして」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

鹿児島県立松陽高等学校 (鹿児島県)

松野 さくら

終始、開いたままで閉まることのない幕は、私たちの世界と繋がっている、彼女たちの人生がこれからも続いていくことを表していたように思う。

息が詰まりそうになる劇であった。放課後デイサービスであるヤンヤンクラブに集まっている子供たちのもとに高校三年生のゆいがボランティアでやってくる。ゆいは、口裂け女にあったことがあると子供たちに告白したことで、子供たちは YouTube のネタ作りのために、「口裂け女」を会いに行こうとする。

この物語からは、主に差別・偏見についてのメッセージを感じた。自分を責める続ける母親と性犯罪を受け心を閉ざして引きこもる姉の面倒を見る、ゆいはヤングケアラーといえる。知ろうとすれば知ることができるのに、私たちは見てみぬふりをしている。ニュースを見れば知ったことを、それ以上、意図的に調べようとしない。それは、知ってしまったら向き合わなくてはならないからだ。まるで心にトゲが刺さったまま抜けないように苦しかった。この劇を見て、ゆいや子供たちが置かれている現実について深く考えさせられた。

「みんな口が裂けても言えない。」言いたくても声を潜めるしかできない。最後のシーンの真っ赤なホリゾン幕とともに、マスクをとってリップを横に拭く場面に、思わず血を想像した。

「私たちは、こんなに血を吐いているのに何も聞こえてこないでしょう。」と訴えかけたように見えて仕方ない。

SNS の扱い、デイサービスを利用する子供への向き合い方、自己承認欲求など、現代のテーマを、丁寧に、緻密に組み込んだ非常に見ごたえのある作品であった。

